平成28年3月31日発行

名古屋女子大学

22号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任　吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

最近、夜空を見上げてそこに輝く星を見たことがありますか？ オリオン座はどこにあるか探せますか？ 空気が澄んでいる冬から春にかけて、天体観測には好条件となります。オリオン座は南西の空にきっと見つけられるはずです。オリオン座には二つの明るい一等星があります。ベテルギウスとリゲルです。日本では三つの星を挟んで向かい合う赤と青の星を平家星と源氏星と呼ぶ地域もあるそうです。そんな夜空の星座は、毎年、同じ場所に規則正しく現れ美しく輝きます。人は夜空の星々の、規則性から暦を作り、神秘性を感じてロマンを見出し、意味づけすることで占うことを考え、言葉を紡いで詩や文学を作り、インスピレーションから歌や絵にし、天からの贈り物として様々なものを受け取ってきました。そして夜空の向こうの宇宙の不思議さに魅了され、もっと知りたいと思った人類は望遠鏡で観察するだけではなく、ロケットを打ち上げ宇宙へと進出していきます。今から47年前の1969年にアポロ11号は月面まで人類を送りました。宇宙は人類のフロンティアとして、今なお、夢を求める科学技術の進歩の方向を指し示しています。こうして宇宙は人文・社会・自然の科学の進歩の基となってきました。

総合科学研究所でも科学の進歩を後押しすべく、平成27年度にも様々な研究が行われました。それらは将来花開く種をまくための重要な研究となっています。また、三つの新しいプロジェクト研究も始まり、それぞれが進歩の基となっていくことを期待します。

私たちが生まれる遥か昔からあるオリオン座の形が変わります。オリオン座のベテルギウスはまもなく超新星爆発を起こし、その位置から消えてしまうと言われています。そんなすごい大事件を私たちは目にするかもしれません。いつ起こるのでしょう。ベテルギウスは地球から600光年離れた遠い星です。私たちは600年前の室町時代の光を今見ているのです。今現在、既に無いかもしれません。不変だと思われた星座も変わります。科学は不変と革新を併せ持つもの。総合科学研究所の研究においても不変的であり革新的な研究がこれから進められていきます。そんな研究所の研究や事業に期待して頂き、ご理解とご協力を頂きますようお願いします。そして、宇宙の壮大なスケールを感じながら、今夜、空を見上げて下さい。そこに科学がきっとあります。

平成27年度「開かれた地域貢献事業」報告

短期大学部生活学科：石﨑智恵利・成田公子・原田妙子・阪野朋子・松本貴志子・森屋裕治
短期大学部保育学科：大嶽さと子・河合玲子・児玉珠美・佐々木昌代・平井孔仁子・幸 順子、家政学部食物栄養学科：片山直美
文学部児童教育学科：渋谷 寿・坪井眞里子・堀 祥子・村田あゆみ・吉川直志・吉田 文、名古屋女子大学同窓会「春光会」：安藤洋子

本研究所が推進する「開かれた地域貢献事業」として地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の両公共施設とのコラボレーション事業は、平成27年度を無事終えることができました。昨年同様、学内公募で本地域貢献事業への参画を先生方にお願いし、応募していただきました。毎年よい評価をいただき、今年も是非にと言っていただき実現しました。瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、生活関係で、今までで最多の11の講座と児童館クリスマスイベントで５つの企画を行いました。瑞穂保健所との交流事業は、「若返り教室きらきらコース（平成27年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、５つの企画を行いました。これらは春光会、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施し、お年寄りの方々に元気をいただきました。

来年度も、地域の方たちと触れ合う機会を持って喜んでいただくとともに、学生が成長することを期待します。　（文責：原田妙子）

1 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成27年9月～平成28年2月
平成27年 認知症・うつ予防教室　若返り教室きらきらコース
「オリジナルＴシャツつくり」「懐かしい童謡や唱歌を歌いましょう」「声を出してみよう」「ハイジの白パンつくり」「香りのよいヒノキを使って」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント「第７回みんなでメリー・クリスマス！」
平成27年12月12日（土）・13日（日）
「クリスマスのオーナメントクッキー作り」「みんなでクリスマスを楽しみましょう」「クリスマスパーティー」「クリスマスのペーパークラフトをつくろう!」「楽しいやじろべえつくり」
②交流事業の各種講座　平成27年8月～平成28年3月
「親のメンタルヘルスについて考える―育児期のイライラと付き合うには―」「乳幼児対象食育相談」「親子で楽しむ音楽あそび」「ハイジの白パンを作ってみよう」「絵本の中の手しごとを体験してみよう」「みんなで歌おう!歌は友だち!」「木のおもちゃを作って科学体験」「おこしものをつくろう」「子育て教室―子どものイヤイヤ、どうしてる?～保護者の交流と親子遊び～」「空気ロケット発射！空気を実感する科学体験」

ハイジの白パンつくり

香りのよいヒノキを使って

みんなでクリスマスを楽しみましょう

絵本の中の手しごとを体験してみよう

機関研究　「創立者越原春子および女子教育に関する研究」
～大正から戦前期の女子教育の諸相～

吉田 文㈹・歌川光一・児玉珠美・嶋口裕基・竹尾利夫・遠山佳治・藤巻裕昌・宮本桃英・吉川直志

本研究では昨年に引き続き、名古屋高等女学校校友会（同窓会）の刊行誌『會誌』を読み解きながら大正から昭和初期にかけての本学における教育について理解を深めていきました。昨年度に加え新たに２人のメンバーを迎えたため総勢９名となり、より充実した研究活動を行うことができました。

今年度の研究テーマは昨年の方針に引き続き、共同研究では対象とする時代を「大正から戦前期の女子教育の諸相」としました。メンバー全体の共同研究としては、当時の名古屋女子高等学校における学校生活の様子を詳しく読み解くことができるように『會誌』より「学校日誌」の記録化を行っています。

個人研究としては、大学創立100年を迎えた本年度、特に春子先生の教育理念や校訓「親切」の実践についての発表に大きな関心が寄せられました。また、遠山先生による越原学園創立百年記念企画展「もえのぼる―女子教育の流れと越原学園の軌跡」の詳細な解説を聞き、学園の歴史の中で、それぞれの時代における学園の様子や社会と女子教育の在り方について再度確認しました。これらの今までに得た知見を今後活かし、来年度の総合科学研究におけるまとめの発表へつなげていきたいと考えています。

（文責：吉田 文）

機関研究　「大学における効果的な授業法の研究７」
～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～

歌川光一・渋谷 寿・嶋口裕基・白井靖敏・杉原央樹・辻 和良・遠山佳治㈹・羽澄直子・服部幹雄・原田妙子・野内友規・吉川直志

本研究は平成27年度～平成29年度の３年間かけて行うものであり、平成13年度から研究所機関研究として継続している「大学における効果的な授業法の研究」（１情報教育、２語学教育、３教養教育、４初年次教育、５評価方法、６学士力育成）の一環に位置づけられています。授業法の研究では、本学にあった能動的学修（アクティブラーニング）、さらには主体的な学びへの導き方法を模索し、主体的な学修体制を検討します。

初年度の平成27年度は、教員には「主体的な学修」を促すための授業の工夫についての成果や意識等を確認するため、学生には「主体的な学び（学修を含む）」についての実態と意識を把握するため、平成27年12月～平成28年１月にアンケート調査を実施しました。また、文学部児童教育学科児童教育学専攻を事例とし、本学の教育に関してどのような意識の変遷があったのか、データ分析および学生へのインタビュー調査をNPO法人NEWVERYの協力のもと実施しました。来年度は、これらの調査の分析を進めていきます。

（文責：遠山佳治）

機関研究　「幼児の才能開発に関する研究」
～豊かな言葉の獲得～

幼児保育研究グループ

「豊かな言葉の獲得について」という研究の２年目として、学年や園全体としての実践から、学年の違いに着目した研究となるように進めています。先行研究として、一つの曲を歌い始めた時と歌いこんだ後に子供たちがイメージしたものを絵として表現し比較をしました。３歳児では、歌うことにより、イメージが曲の歌詞の内容から、さらにその先のイメージの広がりに結びついた表現が見られました。子供の成長年齢によって個々にイメージするものも様々でした。学年の違いによる傾向について、今後も引き続き観察・検討する予定です。また、紙芝居を媒体とした言葉の比較についても、年齢ごとに着目して検討しています。

（文責：森岡とき子）

歌「きくのはな」をイメージして（3歳児）

プロジェクト研究　「教員養成校における創造的思索構築のための教育カリキュラム検討Ⅱ」
～芸術・教育哲学の観点から～

堀 祥子㈹・嶋口裕基

今年度に入り、研究メンバーのゼミ学生による学外造形ワークショップを２回行いました。その内容は、子どもを対象とした造形的活動の企画の立ち上げから活動の運営と実践であり、学生同士が自らの言葉を用いて思考を深め、来場する子どもやその保護者とも対話を通じて意思疎通を図り、臨機応変にその場で立ち回ることを目的としたものです。

１回目は、あたたかみある造形素材である布を使い、幼児の絵画技法でもあるスタンプ遊びを取り入れ、遊びの中での対話を行いました。２回目は、学生同士が対話の中で１回目の造形活動を修正し、フロッタージュの技法を遊びとして取り入れ、子どもに寄り添い対話をしながら活動を行いました。造形的な遊びをメディアとして対話することで、学生は子どもたちの自由でありながらも豊かに想像力を広げていく様子を伺うことができた様子でした。

これらの活動は講義形態ではなく非日常としての枠組みの中、対面形式ですすめました。初対面同士でも手元に作業があることによって気持ちの置き所が生まれ、その場に存在することへの違和感が和らぎ対話も円滑でした。今後、写真などの記録物や学生と子どもの対話の観察などを質的データとして分析を行う予定です。

（文責：堀 祥子）

プロジェクト研究　「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究」

児玉珠美㈹・神崎奈奈・吉田 文

本研究では、乳幼児の発達にとって不可欠な語りかけであるマザリーズを乳児接触を通してどう習得していけるのか、その学習効果について検証しています。平成27年４月より、短期大学部保育学科１年生全体を対象としたマザリーズの表出に関する実態調査を実施しました。これまで自然発生的に表出できると考えられていたマザリーズですが、マザリーズ表出が困難な学生もおりました。現場保育士の音声との比較の結果、ピッチ幅に大きな差異があることがわかりました。そこでマザリーズの特徴である抑揚に注目し、３回の乳児接触体験後の学生の赤ちゃん人形への語りかけ音声のピッチ幅変化を中心に調査してきました。また、学生へのアンケート調査等により、マザリーズ表出が困難となる原因についても分析しています。

音声データが重要な要素となる研究ですので、ノイズをできるだけ除去できる録音環境の整備が今後課題となりますが、マザリーズの学習効果がより顕著になるための乳児接触の方法についても今後検討していきたいと考えています。　（文責：児玉珠美）

プロジェクト研究　「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究」

吉村智恵子㈹・荒川志津代・小泉敦子・宮原亜沙子・磯村紘美・安田華子

本研究は、「子どもの主体性を尊重した保育」に着目して保育実践現場から情報を収集し、学生へ伝える形としていくことを目的としています。27年度は、乳児保育を担当する初任保育者が記述した保育エピソード、乳児のもう一つの生活の場である家庭で母親が記述した育児エピソードを収集しています。それぞれのエピソードを分析し、保育者、養育者の捉える乳児の主体性についていくつかの視点から検討を進めています。

例えば、保育者・養育者が記録したエピソードには、ポジティブな感情やネガティブな感情がみられます。そのような感情が対象としての乳児の感情や行動をどのように受け止め保育行動へと結びついているのかという分析です。初任保育者の中には、乳児の感情・行動を自己の感覚として取り入れるような相互作用を経験し、そこから対象の主体性を尊重した保育行為が生まれているという例が見出されました。そのような保育者のもつ保育者としての資質についても探っています。　（文責：吉村智恵子）

平成28年度プロジェクト研究

「系統性と連続性をもった音楽教育のメソドロジーの開発」～ミュージック・リテラシー向上のために～

稲木真司㈹・歌川光一

小学校教育における音楽の授業で学ぶ内容は、学習指導要領や解説に述べられていますが、それらの内容をどのように教えればよいのかを具体的に示すメソドロジーは示されていません。日本の義務教育においては、小学校・中学校と少なくとも９年間は音楽の授業を受けてきているのにもかかわらず、高校生から一般成人の音楽の読み書き（ミュージック・リテラシー）の能力を見てみると、基礎的な読譜でもままならない状況になっています。これは音楽が算数や漢字のように系統性と連続性を伴う「積み重ね」によって教えられていないことが原因となっています。本研究は、音楽科で教える内容を論理的に系統立てて、容易な内容から段階的に難しい内容へと連続的に教える方法を探っていくものです。　（文責：稲木真司）

「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究Ⅱ」～音声のピッチ幅に焦点をあてて～

児玉珠美㈹・神崎奈奈・大嶽さと子

本研究は、平成27年度プロジェクト研究の継続として進められるものです。平成27年度におきましては学生のマザリーズ表出の実態、現場保育士との差異、マザリーズ表出困難な学生の乳児接触体験による音声変化等について検証しました。その結果、乳児接触を通してマザリーズの学習効果があることが明らかになりました。前年度の研究成果を受けて、平成28年度においては、学生と乳児との個別接触回数とマザリーズ表出の関係についての検証、また、様々な乳児接触方法を通してマザリーズの学習効果の検証をしていきたいと考えています。これらの検証には専門的な音声分析も必要となり、今後の大きな課題となります。マザリーズは乳幼児の発達にとって非常に重要な語りかけです。苦手な学生にも習得できる乳児接触学習プログラム開発に向けて、さらなる研究を進めていきます。

（文責：児玉珠美）

「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究 2」

吉村智恵子㈹・荒川志津代・小泉敦子・磯村紘美・安田華子

本研究は、「子どもの主体性を尊重した保育」に着目して保育実践現場から情報を収集し、学生へ伝える形としていくことを目的としています。27年度に引き続き、初任保育者が記述した保育エピソードに表れた特徴の分析をすすめていきます。乳児保育を担当する初任保育者が対象の主体性を尊重していると捉えられる保育行為に着目することによって、その背景にある保育者自身の主体性についても検討することへと展開していくことになります。さらに、28年度は、家庭での保育にも範囲を広げ、養育者が乳児期の子育て過程で子どもの主体性、自身の主体性をどのように捉えているかを養育のエピソードやインタビューにより調査することを計画しています。

（文責：吉村智恵子）

総合科学研究所主催 平成27年度 大学講演会（平成28年2月26日）

「学生の主体的な学びを育成するには」

講師：島田博司氏（甲南女子大学教授）

講演では、学生の主体的学びを育成するにはどうしたらいいかについて、島田先生の実践をご教授いただきました。主体的学びの「基本中の基本」として学生に指導すべきはノートとりで、オリジナルノートの作成が学生の意欲や理解度を高めるとのこと。先生によれば、主体的に学ぶには、自らが考えて判断し、自己責任で積極的に行動することが期待されていますが、昨今はそうはなかなかならないことを私語やノートとりの意味あいの変化などを例にとりあげながら解説されました。

先生の分析では、学生は努力を厭わず、放っていても主体的に学習する「チャレンジ系」と、ラクに楽しく要領よく自分の好きに生きようとする、放っておくと主体的に学習しない「そこそこ系」に二極化しており、とりわけ後者をどう導くかが主体的学び育成の鍵になるとのお考えから、彼らに有効な４つの仕掛けとして「体験学習」「ゆるやかな共同体」「自己選択の機会」「行動の習慣化」が紹介されました。本学の教育に活かせるヒントを多々得られた貴重な講演でした。　（文責：羽澄直子）

平成27年度 大学講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若返り教室きらきらコース」「作ってみよう♪　オリジナルTシャツ」

きらきらコースにボランティアとして参加しました。今回の交流では、アイロンプリントペーパーに印刷した花や幾何学模様を使い、オリジナルＴシャツを作りました。

私は、２～３人の方とデザインを一緒に考え、私たちが勉強していることを話しました。交流した方が、「若い人からエネルギーをもらう」とおっしゃっていましたが、私たちも学生同士では味わえない昔の事や、家族のことを聞き、とても良い刺激になりました。

短期大学部生活学科１年

オリジナルＴシャツつくり

瑞穂児童館との交流事業「親子で楽しむ音楽あそび」

私たちは、親子で楽しむ音楽遊びを年齢別に行いました。乳児と保護者の回では、わらべうたで遊んだり、季節に合った紙芝居で一緒に歌を楽しみました。また幼児と保護者の回では、ハロウィンの行事を知り、楽しめるようなダンスやゲーム、パネルシアター等を行いました。

親子で体を動かしたり、触れ合うことで充実した時間にすることができました。又、私たちも実際に子どもと保護者に関わることができ、有意義な学びの機会を頂きました。今後も、このような音楽表現活動を保育現場で活かしたいと思いました。

文学部児童教育学科４年

親子で音楽あそび

今年度運営委員

委員長
原田　妙子 HARADA Taeko（短期大学部）
伊藤　充子 ITO Mitsuko（文学部）
間宮　貴代子 MAMIYA Kiyoko（家政学部）
羽澄　直子 HAZUMI Naoko（文学部）
森屋　裕治 MORIYA Yuji（短期大学部）

研究所メンバー

所長　渋谷　寿 SHIBUYA Hisashi
顧問　河村　瑞江 KAWAMURA Mizue
主任　吉川　直志 YOSHIKAWA Tadashi
教授　越原　一郎 KOSHIHARA Ichiro
職員　寺島　まり子 TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第22号をお届けします。ご執筆頂きました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では本年度の活動の概要をお伝えいたしました。本年度の地域貢献事業でも多くの先生方に参加頂き、好評のうちに終えることができました。来年度はまた新たな一歩を踏み出すことになります。大学講演会では大学での授業のあり方を考えるよい機会となり、授業方法について強い刺激を受けました。この号において１年間の着実な研究所の成果・活動をお伝えできたと思います。次年度へつなげ、さらに進歩を後押しできる総合科学研究所の活動となるよう、今後ともご協力をお願いいたします。

文責：吉川直志

名古屋女子大学　総合科学研究所だより
平成28年3月31日　22号
発行・編集／名古屋女子大学 総合科学研究所　〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40 TEL052-852-1111(代)
本誌記事、写真の無断転載を禁じます